

◆寄贈書案内

●樋口兼次名誉教授より著書2点（本館に所蔵）



書名：西暦二〇三〇年における協同組合：コロナ時代と社会的連帯経済への道
発行：2020年6月・社会評論社刊



書名：日本の労働者生産協同組合（ワーカーズ・コレクティブ）のあゆみ
発行：2020年8月・時潮社刊

本書は樋口先生他2名による共著で、平和や反核、人権擁護の分野で優れた報道をした個人や団体を対象にした「第26回平和・協同ジャーナリスト基金賞」の奨励賞を受賞しました。樋口先生、おめでとうございます。

●浅木尚実先生より著書（大行寺分館に所蔵）



書名：絵本から学ぶ子どもの文化
発行：2015年4月・同文書院刊

（目次より）基礎編（「子ども文化」と「児童文化」；子どもの文化財の歴史的背景；子どもの遊びと生活；子どもの文化財の役割と活用法；絵本と子ども）
実践編（発達に応じた絵本の選び方；絵本を用いた実践；絵本を題材にした子どもの文化財）
発展編（絵本を活用した遊びの実践；小学校教育へのつながり；子育て支援と絵本）

●玉宮義之先生より論文掲載書籍（大行寺分館に所蔵）



書名：デジタルゲーム研究入門—レポート作成から論文執筆まで
編著者：小林伸重
発行：2020年6月・ミネルヴァ書房

最先端のテクノロジーと文化が反映されるデジタルゲームは、現在、大学等で研究する機運が高まっています。本書は、初学者が手軽に読める入門書として、研究の歴史や重要文献、調査の仕方や論文の書き方などを丁寧に解説しています。玉宮先生は本書第4・5章に論文を執筆しています。

ささやき

コロナ禍による臨時休館は前期いっぱい続いた。こんなときこそSNS。というわけで「#読書のススメ」は外出自粛中の学生に向けたメッセージを連日つぶやき続けた。

そのなかからひとつ。「来週から図書館は臨時休館。本を読みたいけど借りられない。ならば本の家探しだ。どこかにしまい忘れた本があるはず。本屋で衝動買いして読み始めたのに、ちょっとした違和感から放り出した本も、時間が経てば受け止め方が変わるはず。なぜなら、君の好奇心は、日々変化しているからだ。」因みにオススメ本は今なお賞味期限内です。

令和3年4月1日 発行
編集 図書館だより編集委員会
発行 白鷗大学総合図書館
〒323-8586 栃木県小山山市駅東通り2-2-2
ホームページ <https://library.hakuoh.jp>
印刷 第一印刷株式会社

名探偵の諸相



経営学部教授・総合図書館長
片岡 豊

近代社会が創り出した文芸の一つに推理小説がある。特に合理性を創作の中核とする本格推理小説は中世的神秘主義を排除することによって成立する世界であり、そこに超人的な推理能力を持つ名探偵が誕生する。19世紀に生まれた名探偵についてはすでにふれた（白鷗大学「図書館だより」第34号2009.10）。本欄では20世紀の名探偵を二人紹介しよう。

筆頭にあげられるべきはアガサ・クリスティー（1890～1976）である。クリスティー作品の魅力は明快にして卓抜したプロットと洗練された上品さにある。彼女が生きた時代はイギリスの最盛期ヴィクトリア朝時代の末期であり、斜陽に向かいながらも国家としてのプライドは強く保っていた。

クリスティー作品の名探偵はフランスかぶれのベルギー人エルキュール・ポワロであるが、アガサは出版社に人気のポワロものの執筆を半ば強制された。彼女自身はポワロが大嫌いであつたようで「あの憎たらしい、仰々しい、退屈で、自己中心的な、いけ好かないちび男」と口を極めて罵っている。当時のイギリス人のフランス人観なのかもしれない。そうは言っても作者に崖から突き落とされたシャーロック・

ホームズに比べればまだましである。

アメリカもエラリー・クイーンという名探偵を持った。F・ダネイ（1905～1982）とM・リー（1905～1971）の二人の共作から生まれたクイーンは論理によってすべてを解決する。作中で提示される「読者への挑戦状」はその自信の表明に他ならない。

クイーンの活躍した20世紀前半のアメリカ社会はまさに繁栄期を迎えようとしていた。登場する自動車の多くは、ポンティアック、キャデラックなどフルラインアップ戦略をとったG.M.製であり、大衆車単一モデル主義のフォードに取って代わる。アメリカ中産階級の誕生である。

21世紀、合理性への無邪気な楽観主義は失われたが、クリスティーやクイーン作品は未だに愛読されている。かつてへの憧憬であろうか。



プレゼンテーション・ルームの思い出

元法学部教授

村岡 啓一



白鷗大学の図書館には、本キャンパスにも大行寺キャンパスにも、素晴らしいプレゼンテーション・ルームがある。私は、毎年、基礎ゼミナールの学生による最後のプレゼンテーションの場としてこうした特別室を指定した。予約可能な初日には、誰かに先行予約されないように、真っ先に図書館の担当者の下に急いだ。特に気に入っていたのが本キャンパス3階にある円筒形のルームで、私は勝手に「水槽教室」と名付けていた。誰が生徒か先生かわからない「メダカの学校」と同じで、私は学生と一緒に椅子に腰かけて、グループでプレゼンテーションをしている学生たちの発表を聴いていたからである。私は常々、学生には「フック」の大切さを説いていた。フックとは、いかなる口頭発表であれ、最初の語り口や行動で瞬時に客の心をつなぎとめる「工夫」のことである。いつも私は、例として「フーテンの寅」の口上を披露したが、毎年、学生はポカンとしているだけであった。「これも時代の差か」と

落胆した。

しかし…。当日、各班の発表はフックに趣向を凝らした見事なものであった。クイズから始まったり、漫才や芝居から入ったりと個性的であると同時に、パワーポイントを駆使したアニメーションや映像で説得する刺激的なものだった。毎年、「私にはできない！これも時代の差か」と素直に脱帽した。たった半年しか一緒ではない基礎ゼミの仲間でありながら、適材適所を考えて構成したグループの役割分担も見事であった。私が満足する以上に学生自身が満足していたように見えたのは、私のひいき目だったのだろうか。

私は2020年度で20年間の教員生活を終える。最後の基礎ゼミのプレゼンテーションの場「メダカの学校」はコロナ禍で実現できなかった。心残りではあるが、オンライン授業ではあっても「フック」の重要性は学生に伝わったに違いないと信じている。

〈プレゼンテーション・ルーム〉



本館



大行寺分館

文化人類学を生きる

名誉教授

結城 史隆



れてくるものようだ。」と、60年以上も前に書いているのである。

私も二人のような外国人が行ったことがないようなところに行きたくなった。そのフィールドワークの原点は、フィリピン・ミンダナオ島の奥地森林地帯の焼畑耕作民の村である。私が調査地の小さな村についての翌朝、目が覚めると高床式の家の前には、若者や子どもたちがたくさん集まっていた。昨日訪れた訳の分からない外国人を見に来たのである。彼らは大声で話を交わし笑い合う。しかし、それは彼ら固有のビヌキッド語。まったく意味がわからない。私は友好的な人間であることを示すためにただただ微笑んでいるだけであった。

目の前に人はいるのにコミュニケーションがまったくとれない。それは過酷な状況である。そんな状態にいると2～3日で精神がおかしくなる。私は自分の準備の甘さを呪い、いったん町に戻った。

つまり、「何を研究するか」「どのように研究するか」という前に、何もない、知り合いもないところで、「どのように生活していくか」「どのように村の人とつきあっていくか」が問題になる。何もなくても時間だけはたくさんある。私はひたすら言葉を覚え、ひたすら人々の関係を見つめ、ひたすら彼らの後について畑や森に入っていた。

そして1年と数ヶ月。衣食住すべて自足的なコミュニティの中で、家族や男女のありかた、人々の関係、秩序維持や紛争の解決、精霊との交信、モノの生産や消費・分配・・・人間社会の根本にあるものを学ばせてもらった。ミンダナオ島の小さな村で得たことは、その後の考え方・生き方に大きな影響を与えることになった。

大学3年の時に文化人類学を専攻し、この退職の時を迎えて50年になる。振り返ってみると、文化人類学者というのは「文化人類学を研究する」こともさりながら、「文化人類学を生きる」ということではないかと思ってきた。この文化人類学専攻のきっかけになった本が二つある。

一つは本多勝一の『ニューギニア高地人』で、1964年に行ったインドネシアのイリアンジャヤにおける調査の記録である。私が中学生の時に朝日新聞の夕刊に連載され、のちに単行本となった。山岳地帯奥地に入り、当時、まだ石器を使っていた種族の報告書である。ペニスケース以外は裸体の男性たちに囲まれたときの戸惑い、親しくなると「簡素で家庭的な生活」に感心し、身内の死などの悲しみを乗り越えるために指を切り落とす習慣に驚愕する・・・その記事は毎日驚きの連続で、わくわくして読んだものである。

もう一つは中根千枝の『未開の顔・文明の顔』(1959)である。インドのアッサムの調査やヨーロッパの滞在を交えながらの当時としては珍しい強烈な文明批判が横たわっている。ガイドとポーターを連れて女性一人でジャングルの中に入っていく。大変な行程だが彼女は次のように書く。「ジャングルではよく思った。私のこの最小限の物質しかない小さなテントを、王侯貴族の宮殿に誰かが交換してくれようとしても、私はこの愛すべきテントをとるだろう、と。」

そして、ロンドンやストックホルムの豊かで快適な生活をしていると、ついついインドの喧騒・雑踏・独特の匂いを懐かしく思い出す。「生活水準が高くなれば、高くなるほど欲求が強くなるから、精神生活は貧しくなる恐れさえないだろうか。本当に貧乏ということは、その欲求と所得の度合いが大きいほど、自覚さ